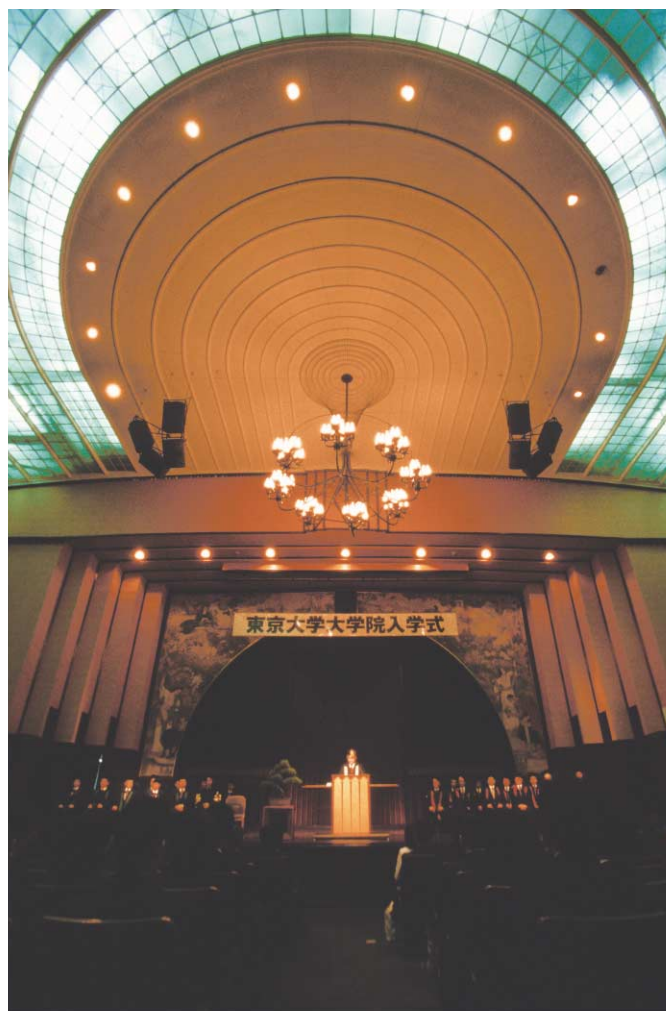




学内広報

No.1289

2004.4.28
東京大学広報委員会



平成16年度大学院入学式行われる（2ページに関連記事）

CONTENTS

特別記事	2	部局ニュース	18
平成16年度大学院入学式行われる、大学院入学式 総長式辞、大学院入学式来賓挨拶 蓮實重彦前東京 大学総長、大学院入学式来賓挨拶 吉川弘之元東京 大学総長、平成16年度入学式行われる、入学式総 長式辞、入学式教養学部長式辞		先端海洋システム研究センターの看板が上掲される 掲示板	18
キャンパスニュース	16	第29回生研公開講座 イブニングセミナー「最先端 エレクトロニクス—研究動向と将来への展望」、第 77回五月祭の期日決まる、ボランティアを募集し ています	
平成16年度進学指導担当教員決まる		淡青評論「名前が変わった」	20

平成16年度大学院入学式行われる

平成16年度大学院入学式が、4月5日（月）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。全学的な大学院入学式は、本年度はじめて行われ、式は、第一部（9時30分開式）、人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、法科大学院、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府、公共政策学教育部、第二部（11時10分開式）理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科、情報理工学系研究科に分けて行われた。

式には約2,540名（第一部約1,100名、第二部約1,440名）の新入生と、その父母など約1,120名、合わせて約3,660名が出席した。父母控室である法文2号館31番教室、文学部1番大教室及び3番大教室に、モニターを設置し、大講堂での式典の様相を放映した。なお、第一部においては、父母等も大講堂2階席に入場して行われた。

佐々木総長はじめ理事、副学長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の方々がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、壇上列席者の紹介があったのち、佐々木総長が約10分にわたって式辞を述べた。

続いて第一部は、蓮實重彦前総長から、第二部は、吉川弘之元総長からそれぞれ約25分間にわたり来賓の挨拶をいただいた後、式を終了した。



平成16年度大学院入学式の様子

大学院入学式総長式辞

今日ここに東京大学の大学院に入学、進学された皆さんに対し、東京大学を代表して心から歓迎の意を表します。（今年から新たに設けられた法科大学院、公共政策大学院の入学者の皆さんには、特に大きな声で歓迎の言葉をかけたいと思います。）

皆さんはこれまでの学問的研鑽を踏まえながら新たな飛躍を求めて大学院で更に研究する道を選択しました。この選択が有意義であったことが実証されるよう、その新たな挑戦が実りある成果を結ぶよう期待しています。

大学は知的探究心を基本に組織されています。ここでは知的探究心に基づく活動であればあらゆる事が許され、寛容されます。それだけに厳しい世界であることも事実です。恐らく、知的探究心に自信のない人にとっては誠に居心地の悪い世界でしょう。そして多くの人々にとって知的探究心は他の関心に比べて決して高い価値を持ちませんから、彼らにとって大学は常によく理解できない、不可解な世界であり続けるであろうと思います。「象牙の塔」という言葉にはそうしたニュアンスがよく出ています。

皆さんがこれから挑戦する知的世界はなまじの知的探究心の枠を遥かに越えた高度に抽象的・分析的世界であります。幾重にも重なった知的階段を一步一步踏みしめることによってのみ初めて接近可能な領域に属します。この限りなき登坂を通して、日本においては元より世界に冠たる水準に到達することがあなたの方に期待される所です。この限りなき挑戦に臆することなく、あらゆる精力を傾注していただきたい。研究という活動は人間の全エネルギーの発露であり、若い時代のエネルギーの大きさと素晴らしさは目を見張るものがあります。一気に長足の進歩を遂げ、人生最高の成果をあげることも珍しくありません。その意味でこれからの数年間は皆さんにとってまたとない好機であることを肝に銘じ、悔いのない挑戦を行なってもらいたい。

東京大学は数多くのCOEプログラムに代表されるように優れた研究基盤と皆さんに対するさまざまな支援の仕組みを準備しています。また、研究科に限らず、数多くの附置研究所が皆さんを歓迎しています。こうした豊かな知的ストックは皆さんのあらゆる挑戦に応えられる充実したものであると確信していますが、法人化を契機に私は新しい研究領域の開拓を本学のイニシアティブで行なうような仕組みも準備しています。また、既存の学問領域を横断するような研究活動に対して大学の判断で積極的な支援を行なうことも可能になりました。これが



らも一層知的刺激に富む研究環境の整備を進めていきますから、皆さんの方もこれに応じて思い切り挑戦を行なっていただきたい。

それと同時に、皆さんには知的探求の持つ意味について考え、必要に応じてそれを他の世界の人間に伝える努力もまた求められます。大学という組織は知的探究心をそれ自身目的にすることに對して非常に寛容な場所ですが、大学は社会全体を代表するものではありません。大学は決して社会の縮図ではなく、極めて一つの特異な社会組織であると考えべきでしょう。そもそもあらゆる知識はわれわれがいわゆる現実をどう考え、どう観るかという視点に常に関わっています。しかも、この二世紀余りを考えてみるならば、知識は現実を解釈する武器であるだけではなく、現実を大きく変え、新しい現実を作り出すという巨大な力を発揮してきました。今や科学技術を除いて現代社会が理解不可能であり、「知は力なり」というフランシス・ベーコンの命題はわれわれの生活を深く貫いています。

知識の実践的帰結についての問いかけが出てくるのは、こうしたやむを得ない事情があるからです。この問いを全く無視して知的探究心の殻に閉じこもるのは社会の側からいえば、フェアでないこととなります。この問いかけにどう応答するかを考えるのは些か片手間の仕事のように見えるかも知れませんが、実は入念な準備を踏まえた上で行なわれるべき大事なものです。それぞれの知の領域によって応答は多様でしょうし、ましてや「直ぐ役に立つ」といった回答に対して劣等感を感ずる必要は毛頭ありません。

今や日本においても知識基盤社会といった言葉が日常的に使われるようになりました。高度な専門的・先端的知識の持ち主が社会において大きな役割を果たすことは当然に期待され、そうした人材の役割が大きくなることへの抵抗感は小さくなりつつあります。皆さんは東京大学にとって貴重な人材であるだけではなく、社会にとって大切な人材です。それだけに自らの探求する知識についての社会の側からの問いかけを知的に受け止める入念な準備をしておいてください。

更にはこうした問いかけに受身で対応するだけではなく、専門的・先端的知識の役割を積極的に主張することも必要になります。社会というものは知識の存在感が高まるのを決して単純に容認するものではありません。知識の自己主張を喜ばない勢力による数多くの抵抗が行われることは必至です。それだけに皆さんは知識の担い手として自らを全うするために社会の現実に対面し、時には対決しなければなりません。そしてこれこそ知が社会においてどのような位置を占めることができるか、知は現実をどの程度変え得るかに関わる決定的なポイントです。その限りにおいて、知の担い手は批判的精神の持ち

主にならざるを得ません。若し、知が社会的に連戦連敗の中に止まっているならば、それは精々アクセサリーにしかありません。それが社会的に真剣に受け止められる存在になろうとすることは現実との熾烈な抗争を必ずや伴います。

これからの数年間の研鑽を通して皆さんがこれらの課題に立ち向かう逞しい存在に成長すること、それを通して大学の持つ潜在可能性の大きさを多くの人々に印象付けられるようになること、こうしたことを私は皆さんに期待しています。皆さんの前途に輝かしい未来があらんことを祈って、東京大学最初の大学院入学式における私の式辞と致します。

平成十六（二〇〇四）年四月五日

東京大学総長
佐々木 毅



大学院入学式会場（大講堂）

大学院入学式来賓挨拶

蓮實重彦 前東京大学総長

大学院への進学をはたされたご列席の男女に、祝福の言葉を捧げます。この晴れの場で祝辞を述べる機会を与えられましたことは、私にとって大きな名誉であり、佐々木総長をはじめ、東京大学の関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



二〇〇四年は、日本の高等教育の歴史にとって大きな意味を持っております。国立大学法人法の施行により、東京大学が法人格を持つにいたった最初の年であるからです。この変化は、日本の国内のみならず、世界も注目しております。例えば、フランスの「ル・モンド」紙は、四月三日付けの紙面で、過去一世紀でもっとも重要な変化が日本の高等教育にもたらされたと大きく報じております。不況克服のために構想された制度改革が、大学においては、研究への集中的な投資によって実現されようとしていると、フランスの高級紙は論じております。法曹関係の人材不足を改善する作業にも積極的に取り組んだという言葉で、法科大学院の創設にも触れております。皆さんがこの大学院でござされる数年間と、それがもたらす成果とは、諸外国も注目しております。そのことに、自覚的であっていただきたい。

とはいえ、高等教育の制度改革が行われたことに、ことさら意識的になる必要はありません。制度の如何にかかわらず、思ってもみないときに、自分でも驚くほどの変化を実現することこそが、若い研究者の特権だからです。大学院で学ばれる皆さんの一人ひとりが変化の潜在的な主体であり、大学は、その顕在化を誘発することで、みずからも組織として真の変化をとげるのです。制度改革以前にそうした好ましい知の環境たりえていた東京大学が、法人格を持つことで、その傾向をさらに助長するはずだと私は確信しております。

大学は、もっとも迅速かつ効果的に、所定の目的に到達する個人を大量に生産する場ではありません。大学は、到達すべき目標からふと遠ざかり、大きく迂回したり逸脱したりする学生の生産性を正当に評価する場です。例えば、利根川進教授が、理学部生物化学科に閉じこもり、そこから一步も足を踏み出さなかったとしたら、ノーベル医学生理学賞に輝くことはなかったでしょう。ノーベル物理学賞を受賞された小柴名誉教授の受賞対象であるニュートリノ天文学は、迂回と逸脱をくり返すことでたどりつかれたまったく新たな研究領域です。こうした優れた研究者は、いずれも、いわば放蕩息子のように研究領域から逸脱し、迂回に迂回をかさねながら世界

的な評価の対象となっています。二〇世紀を代表するフランスの詩人ポール・ヴァレリーにも、不可解な沈黙の一時期がありました。彼らは、迅速かつ効果的に所定の目的に到達することなく、放蕩息子のように目的から大きくずれて行くことがあったのですが、他方、彼らの迂回や逸脱の創造的な意味に敏感に反応した人たちが、世界には確実に存在していたのです。

いま、「世界には」といいました。それは、あなた方が実現するだろう研究成果を期待をこめて見守っているのは、東京大学の指導教授だけではないということの意味しています。大学院に進学されたことは、それ以後の研究のことごとくが、世界の視線にさらされることを受け入れたということにほかなりません。ここで個人的な過去を告白するならば、いまから四〇年前に私が人文科学研究科に提出したフランス文学の修士論文は、ひどく評判の悪いものでした。私の研究方法は、当時の東京大学の審査基準からすると、アカデミズムを大きく逸脱するものであり、研究者を続ける意志があるならば、考え方を換えねばならないと指導教授からひどくお叱りを受けました。しかし、若さからくる過剰な自信からでしょうか、私はまったく考え方を換えませんでした。私は東京大学を捨てる決意を固め、フランスに行き、時間をかけて博士論文を仕上げました。パリ大学に、私の研究方法を評価する指導教授がおられたからです。日本の大学に就職するという点では、それは長い迂回であり、逸脱だったというべきでしょうが、自分のことを見ていてくれる人がこの世界には必ず存在すると、そのとき確信いたしました。

いまでは、四〇年前の東京大学大学院の教育が、方法に対する寛容性をやや欠いていたものの、フランス文学研究の本場で十分に勝負できる若い日本人を着実に育てていたという事実の方が重要だと、反省をこめて考えています。ここで申し上げたいのは、世界にはあなた方の研究を理解する人が必ず存在するのだから、迂回や逸脱を怖れてはならないということにつきています。時間の無駄であるかにみえる迂回や逸脱だけがもたらす豊かさというものがあるのだと、申し上げたいのです。

迅速かつ効果的に目標を実現しうる人々は、秀才と呼ばれています。私自身が東大で学んだことの最大の資産は、秀才と呼ばれる人々の限界をいやというほど見てしまったことにあるかもしれません。私が比較的良好に知っているヨーロッパの大学でも、迂回も逸脱も知らずに達成される彼らの目標の貧しさをこの目で見てきました。いわゆる秀才は、与えられたコンテクストを疑いません。あるいは、複数のコンテクストの中から、いまの自分に何がふさわしいかを即座に判断することができます。しかし、彼らの限界は、変化に対する対応能力の不在にあります。変化を恐れ、みずから変化を実現することもあ

りません。それに対して、知の放蕩息子たちは、時間をかけてではあれ、既存のコンテキストとは異なるものを創造してしまいます。それが、変化という言葉で呼んでいるものにほかなりません。

私は、新たに大学院に進学された男女に向かって、ひたすら放蕩息子たれ、放蕩娘たれと、悪への誘惑を試みているわけではありません。一見したところ無駄な浪費としか思えぬ時間にこそ、豊かな体験を約束してくれる貴重な何かが含まれているということをお願いなのです。その意味でも、皆さんに、複数の外国語を修得することの重要性を指摘したいと思います。ここには、理系の研究者も多くおられ、そうした領域では、英語で論文を書くことは必須となっていますが、英語は、理系文系をとわず、誰とも喧嘩ができるほどに身につけておいていただきたい。それ以外に、二つか三つの外国語には通じておいてほしいと思うのです。グローバル化された国際社会では、英語がコミュニケーションのツールとして重要なのは当然ですが、気の利いたアメリカ人やイギリス人なら必ず複数の外国語を話せますから、英語が出来るだけでは彼らに太刀打ちできません。研究発表に有効だという視点から英語しか外国語のできない人たちの知的な限界に、私は何度も立ち会っております。個人的には、中国語か、韓国語の初歩を若いうちに身につけておかなかったことを、深く悔やんでおります。

実は、英語を話せばコミュニケーションが成立すると思うのは、途方もない勘違いです。英語圏の人間同士でも英語が通じないという体験をめぐって、シドニー大学のゲイヴイン・ブラウン学長が面白い挿話を披露されたことがあります。環太平洋の大学の学長たちの会議で、フレンチ・アクセントの英語を話す奇妙な日本人の学長として私のスピーチが話題になり、東アジアの学長たちが、それぞれの訛りについて語り合っていたときのことです。ブラウン学長はスコットランド出身の数学者で、ケンブリッジを卒業しておられます。若くしてオーストラリアに赴任して講義を始めたところ、半年ほどして学生がまったく自分の講義の内容を理解していないことに気づき、大いに困惑されたそうです。悩んだすえに、講義の内容を丁寧に黒板に書き始めた。すると、学生たちは驚きの声を挙げ、彼のスペルはわれわれの言語と同じだと騒ぎ始めたというのです。この話には多少の誇張も含まれていかもしれませんが、英語が必ずしもコミュニケーションのツールとして充分でないという例だとブラウン学長は何度も強調されました。

フランス滞在が長く、英語圏に二週間以上滞在したことのない私は、自分のヒアリングの能力にいつも悩みをかかえています。ある国際会議で、MITのチャールズ・ベスト学長がスピーチをされたとき、そこにまぎれこんでいた固有名詞がどうしても聞き取れなかったことがあ

ります。そこで、英語が達者なはずの東大の同僚にあれは誰だったのかときいてみると、そんな固有名詞のことなどまったく覚えてはおられませんでした。数人の日本人の学者にあたってみたところ、答えはまったく同じでした。そこでMITの教授数人にも同じ質問を試みたところ、驚くべきことに、誰も誰一人聞き取れなかったといえます。ヴェスト学長のスピーチは、アメリカ人にも通じていなかったのです。そこで、恥をしのんでヴェスト学長自身に伺いました。すると、学長は自分の南部なまりをお聞かせしてしまつてと謝られてから、経済学者のケインズの名前を挙げたのだと教えて下さいました。それでスピーチの内容も合点がゆき、意見の交換をしたのですが、ヴェスト学長は、自分のスピーチを本気で聞いてくれたのは、ことによるとあなた一人だけかもしれないと、照れたように目くばせをされ、あなたのフレンチ・アクセントの英語のスピーチはきわめて魅力的だと慰めてくれました。以後、われわれは親しい友人となったのです。その後、重要な集会にキーノート・スピーカーとして招いて下さったのですから、たんなるお世辞ではなかったでしょう。

ここから引き出される教訓は、わからないときは、聞いてみればよいということにつきています。わかったふりをしているより、その方が遥かに深いコミュニケーションが成立するということです。

ところで、つい数日前に、韓国のある有名大学の教授から、お手紙を頂戴しました。自分にはわからないことがあるので、あなたに聞きたいという書き出しでした。その方は、日本の大学を卒業され、カリフォルニア大学のバークレー校で経営学のPh. Dをとられた方で、日本語も理解されます。その方の質問は、正岡子規の『歌読みに与ふる書』をめぐるものでした。ほぼ私の同世代で、きわめて教養の豊かな方なのですが、明治三十一年に発表されたこの書物を初めて読み、その内容に驚いたので、これはどういうことなのか教えてほしいというのがその内容です。この韓国の教授を驚かせた内容というのは、『古今集』の価値を貶め、『万葉集』を重視するという子規の立場です。韓国人の教授にとって『万葉』の歌はまだまだ大陸的な味わいを残しており、『古今』、『新古今』にいたって初めて日本風の歌が成立すると思うのだが、正岡子規はなぜそれを否定するのか。その立場ははたして正しいのか。

私は、今晚、この教授への返事を書かねばならないのですが、皆さんなら、どんな内容の手紙を書かれるでしょうか。自分は文系の研究者ではないからとか、自分は詩歌や古典文学の専門家ではないからといった言葉は、答えを回避する口実とはなりえません。さきほど、大学院に入られた以上、あなた方の活動を見ている視線は世界的に存在すると申しました。それは、同時に、あなた

方の専攻にかかわらず、日本文化に関して、この種の質問をいつ受けても不思議でないということを意味しています。知らないという答えは、あなたの人格を深く傷つけることになるでしょう。では、あなた方は、どう答えられるでしょうか。

祝辞を終えるにあたり、これを、皆さん方の一人ひとりに、宿題として課したいと思います。書面で提出せよとは申しませんが、自分にどんな答えが可能なのかを、何かの機会に、どうかお考え頂きたい。これもまた、迂回であり、逸脱であります。ときには所定の目標から遠ざかることで、あなた方の大学院での数年間が豊かなものとなることを祈らずにはおれません。



蓮實重彦前東京大学総長による来賓挨拶

大学院入学式来賓挨拶

吉川弘之 元東京大学総長



大学院入学、おめでとうございます。この3月に卒業してすぐに大学院へという道をとった方もいらっしゃるでしょうし、しばらく仕事をして改めて大学院で勉強をしよう、と考えた方もいらっしゃるでしょう。いずれにしても新しい、さらなる学問の学習と研究へ入るといふ今日、皆さん、心を弾ませていることと思います。

私は、科学者の話をしてみようと思います。科学といっても、これは別に自然科学だけでなく、文科、理科を問わず、学問全体を指すものですが、皆さんは大学を卒業することによって、科学というものをかなり学んだと思いますが、大学院というところでこれを学ぶ研究者になる方もいるでしょうし、いわゆる科学者になる人もいます。科学はぐっと皆さんに近いものになると思います。恐らく、研究者にならない方でも、大学院で学んだということになると、これは科学を身に付けたわけですから、私は広い意味での「科学者」と呼んでいいものだと思います。このように高度な学問、科学というものを身に付けた方々が、社会の中でどのような役割を果たしていくのか、現代の社会においては重要なことだと考えているわけです。

科学と社会というのは、長い間、深い関係を持っていたわけですし、現代においては、その関係というのはますます深くなってきていると思います。科学の影響というのは、このホールをひとつとってみても、音響をどのようにするのか、ということ考えた時、そこには音響学というものが必要だ、ということになる。現代生活というのは、様々な科学が影響しているということは、当然のことであると思います。この科学の結果は、そのような知識を誰がつくり、誰が使い、もし何か起きたときに誰が責任をとるのか、といったことが、必ずしも明解ではない。これは社会の中に科学が溶け込んでしまった理由なのでありますが、しかし、それではいけない。正しく使われるべきであるし、正しい科学というのは語弊があるかもしれませんが、良い科学に発展していただきたいというのが、一般社会の期待するところでありませぬ。

ひとつの例をあげるのですが、最近皆さんもよく新聞等で見たり、専門にされている方もいらっしゃると思いますが、『地球温暖化』ということがあります。この地球温暖化問題というのは今に起こったことではありません。19世紀の初頭に、フーリエ解析で皆さんもご存

じの、数学の専門家という方もありますが、熱の専門家がいて、熱解析の研究を通じて発見した現象に名付けた『温室効果』という言葉は、このフーリエがつくった言葉です。『地球温暖化』は、この言葉から始まったと言ってよいと思います。

19世紀の半ばになりますと、今度はチンダルという人が、地球の炭酸ガスが増えると温暖化が進むという説を出します。さらに19世紀の終わりから20世紀初頭になりますと、アーレンユースという人が計算をします。地球の炭酸ガスが増えると地球が温暖化するというのを、既にその時に発表しているわけです。しかしアーレンユースはスウェーデンの人で、非常に寒いところに住んでいましたから、「これから人類は良くなる。これからの人類は温室のようなところに住めるようになって、暖房費がいらなくなり、これは素晴らしいことなんだ」ということを論文に書いているわけで、今とはだいぶ違っています。

しかしその後になりまして様々な研究があり、特に1950年代になりますといろいろな測定が進んで、炭酸ガスの増加によって地球の温度が上がるということが、定量的にわかってきます。そこからいろいろな予測が起これ、海面が上がることで陸地が水没してしまうとか、地球上の生態系に変化が起これ、これがいろんな伝染病の変化を起これとか、そういった悪い事態を引き起これということが、警告科学者によって警告されるようになってきます。多くの科学者による警告は、長い間、社会に届かなかったと言ってよいのです。

世の中に届くには、二つの条件があります。ひとつは、その問題が重要であると受け止める社会の仕組み。一方では、科学者がバラバラではなく、ひとつの合意した形で警告を発する。この二つの条件が必要だと思います。

温暖化問題に関して言えば、こうした地球環境問題というのは1972年、ストックホルムで行われたストックホルム会議、あるいは人間環境会議というのがありますが、そこで様々な議論が行われました。その当時になりますと、温暖化問題は実はここでは議論されなかったのですが、資源の枯渇の問題であるとか、あるいは酸性雨の問題であるとか、当時問題になっていたことについては様々な議論がされています。しかしこれは、経済・社会・理事会という、国連の中につくられた委員会であったので、科学者たちの会ではありませんでした。先ほど申し上げたように、多くの科学者が温暖化の警告をしていたのですが、どういうわけか、この会議では温暖化について取り上げられることはなかったのです。このように、科学と社会というのは、必ずしもうまく意見が流通するものではなかったということが、歴史的に見ることが出来るわけです。

実は、地球温暖化の問題が、科学者からの警告として、

社会に確実に受け止められるのは、私は多分、1985年であったのではないかと思っているわけです。科学者たちが集まりまして、ICSUという、日本語では国際科学会議と言っていますが、学会の連合、皆さんもご存じだと思いますが、国際物理学連合なんていうものがあります。これは多くの学会が集まって連合をつくる。そういうメンバー、学術連合、それから各国のアカデミー、日本ならば日本学術会議、そうしたものがメンバーになっている国際科学会議・ICSUが主催しまして、オーストリアのフィラハというところで国際会議を開きました。これが実は温暖化問題の研究者の集まりであって、座長であったブルースという人が、この会議ではぜひ全員一致の声明を出そう、という決断をします。ここが大事なところ。学者というのは、いろんな学説があって、いろんなことを言うんですけども、「私たち科学者はここまでは合意していることができる」と。そこから先は学説の差で、様々なことを言う。これはもちろん自由です。科学者というのは、それぞれ自分の学説に従ってものを言う権利を持つ。しかし、『ここまでは合意しているから、殆ど正しい。そこから先はまだ研究が必要なんだ』ということを確認したうえで、現在の科学者の集団は、これは科学コミュニティといいます、『科学コミュニティとしての結論はここまでなんだ』ということを経験にして、社会に発表する。そういう会にしようじゃないか』ということ、フィラハの会議で提案します。

これはひとつの提案となり、それを国連で準備していた人間環境会議に始まるそのグループが受け取ることとなります。そして実は、これも国連の中にあるひとつの会議なのですが、環境と開発に関する委員会というのがありまして、ブルントラントというノルウェーの首相だった女性ですが、この方が座長となって、1冊の本を書きます。『我らが共通の未来』という本ですが、このブルントラント委員会が、フィラハの提言を聞き入れることになり、ブルントラントの著す本には、そのことに触れています。

このようにして、国連という社会の代表と、科学コミュニティというものが対話を続けながら、非常に困難はあったんですけども、とうとうそれがあつた種の合意に達するということがわかるかと思います。

このように、温暖化だけでなく、様々な環境問題を含め、人間がどうなっていくのか、地球がどうなっていくのか、という科学者の警告を聞いて、それがひとつの社会としての国連に響いていく。その結果、出てきた問題は、『持続可能な開発=sustainable development』という概念でした。これは地球温暖化問題だけでなく、地球が抱えているもうひとつの大きな問題として、南北格差の問題が存在しているということがあります。

科学が進んだ、豊かになった。しかし、その科学によ

る恩恵を受けることができない、例えば、電力を使えない人々というのは、人類の半数に達している。あるいは4分の3とも言われています。また、これもよくご存じのように、食糧不足に悩んだり、薬がなく疫病に悩む地域もある。

一見、地球というのは科学によって豊かになり、安全になったと思われまふけれども、非常に多くの人々を積み残してしまっている。こういった低開発地域を残してしまったという大きな矛盾を持っています。そして、その低開発地域を経済開発によってどんどん開発しようということになると、これは工業開発で、既に指摘された環境問題に悪い影響を与えるんです。先ほどの炭酸ガスも同じことで、工業活動を盛んにすれば、すなわち排出物としての炭酸ガスが増えてしまう。その結果、温暖化が起こる。そうすると、『持続可能な開発』という一見綺麗な言葉は、大変な矛盾を含んでいるということになります。

地球を持続する、環境を保全して悪くしないということを考えてみると、開発を抑えなければならない。しかし、飢餓地域を持っているような低開発地域における非常に困難な状態をいち早く解決しなければならないということでは、地球の多くの部分で開発を進めなければならない。それでは、地球に負担がかかってしまう。解けない連立方程式のような意味で、ブルントラント委員会は『持続可能な開発』ということを行いました。

しかしながら、そのブルントラント委員会の結論も、「決して解けない方程式ではないんだ、現状のままでいったら悪い結果しか得られないけれども、あらゆる地球の領域で、人類のセクターで努力を重ねれば解くことが可能である」ということを言っています。特にその中で、この委員会が強調したのは、やはり『科学技術の発展』ということでした。従ってここには当然、『新しい科学技術』が必要になる。それは一体どういうものか、ということなのです。

実は私は10年前に、本学の学生の皆さんの前で話をする機会があったんですけども、その時に『現代の邪悪なるもの』という話をいたしました。これは一体何なのか。人類は長い間、様々な邪悪なるものというか、人類と敵対するものと戦ってきました。それはいくつも例をあげることができます。例えば、人間の持っている悪い欲望。それを抑えるためにいろいろな知恵で考えていく。これは古代に『倫理学』という学問が生まれてくることになるのですが、自らの欲望と戦うものであったと思われまふ。あるいは圧政。悪い政治家がいて、人々を圧政の下（もと）に置こうとします。その時に圧政者の発言の中に論理的な矛盾がある、虚偽がある。そして圧政者の悪を暴こうとする。そういうことが行われてきました。これが『論理学』となっていきます。

こういった話は文科系だけでなく、理科系でもたくさんあります。一番わかりやすいものでは、人類をたびたび襲い続けた伝染病がありますが、これは始めは神の祟りだと思われていたりしたんですけれども、ついに細菌、病原菌の仕業だということがわかる。そして人類は細菌を制御するということに成功して、伝染病を抑え込むことにも成功するわけです。

こういった外的な圧政者や、自分の心の中の邪悪な心、病原菌など、人類を攻撃する様々なものに対しては、人間は常に戦って、知恵を使って打ち勝ってきました。これが人類の特徴です。決して強い生き物ではなかったはずですけども、人類が、少なくとも見かけ上、地球上でここまで大きな繁栄を示しているのは、知恵を使って敵対的な邪悪なるものを排除することに成功したからだということです。そして恐らく、人間たちのこうした努力が倫理学になったり論理学になったり、細菌学になったりすることで、それこそが今日、話題にしています科学ですけども、こうした科学的知識というのは非常に整った形で、世代を通じて伝えられていく。現代でも学校というものを通じて、知識は世代間に伝えられていくのですけれども、そのような形が科学に附随して起こってきたということでもあります。多くの学問というものを、既に私たちはつくったわけです。

それでは、我々は多くの学問を身に付けているし、過去からの蓄積がある。全てのものを解決できたのだろうか？と。どうもそうではない、というところが問題であります。それはどういう問題かということ、先ほど申し上げた『持続的な開発』というのは解けない方程式なんだという、これは新しい問題です。これに失敗すれば、恐らく人類は滅んでしまう。飢餓地域が増えて、政治的な不安が起こる。あるいは、そういうことを救うことができても、地球環境を破壊してしまえば、自分たちの資源を枯渇させたり、温暖化によって地球は壊れてしまう。こうした大変さは大きな『邪悪なるもの』です。そしてこのようなことというのは、どうも外敵ではないようです。人間の行為そのものの中にある、大変解くことの難しい問題である。人間にとって『邪悪なるもの』であることはわかりますけれども、それに対して立ち向かっていけばよいという単純なものではない。私はこれを『現代の邪悪なるもの』と呼んだわけです。

『現代の邪悪なるもの』というのは、様々なものがあると思います。『持続可能な開発』という、すなわち南北問題における貧困と環境問題という代表的なものがありますけれども、それ以外にも多くの問題があります。それ以外の方が大きな問題かもしれません。人口の急激な増加。これはあらゆることの背後にある問題であるのも、確かです。民族間の紛争、テロリズム、HIVなどの新しい感染症の発生、BSE、鶏インフルエンザというよ

うな新型の病気、また人工物による事故、その人工物による事故が大型化していく。あるいは都市生活における孤独であるとか、情報犯罪といったような、現代に特有な、立ち向かわねばならない『邪悪なるもの』が発生しているのは、確かです。

しかしこれは、外部から攻めてくるというものではなくて、何か自分たちが「豊かになりたい、安全になりたい」という行動をした結果として、全く予期せぬままに起きてきた、これを『現代の邪悪なるもの』と呼んだわけです。

それでは、こういったものをどのように解決したらいいのか。多分、病気がバイ菌によって起こるものだと気が付くと、ある一群の人々、医師や科学者という人たちが、細菌というものがどういうものかを調べ、制御する方法を発見し、細菌学という学問体系をつくと同時に、細菌をどのようにコントロールするかという技術をつくる。こうした一群の、少数の人たちが専門家となってそれに立ち向かえば解決するということばかりでした。

例えば、天災が起こる。洪水が起こる。洪水を止めるには、一群の人がやって土木工学という知識になり、現在でも土木工学者がおり、土木工学技術者がいて、洪水を止めようとする。このようにどんどん専門化する。たくさんさんの過去の『邪悪なるもの』と戦って、打ち勝ってきた。いわばその結果が現在の学問体系だとすれば、私たちのいる土木工学や細菌学、あるいは倫理学や論理学というたくさんさんの学問領域というものがありますが、これはある意味、長い人間の戦いの結果として手にした、華麗な財産、華麗な体系だと、私たちは考えてよいわけです。

さてその方法が、『現代の邪悪なるもの』に再び適応できるものか、ということですが、それでは『持続可能な開発』というものが、一群の専門家たちによって行われ、そしていずれそれが解決され、持続可能な開発学という学問になって、以後の人類は安心して暮らせるのでしょうか。

そういう期待感を持つのは、ある意味当然なんですけれども、それはそうではありません。『持続可能な開発』というのは、あらゆる人類のセクター、すなわち、あらゆる職業の人が参加しなければ解けない問題なんだよ、と言っているわけです。そこには伝統的に考えた学問の専門性だけではない、ということでもあります。

さて、それでは具体的にこの問題を、どのように解決するかということになりますが、私は、結論的に、科学者が社会の中に入っていくということかと思えます。

先ほどの『持続可能な開発』というのが公的な地位を与えられるのは、1992年に行われましたリオ・サミット、地球サミットです。その地球サミットを受けて、実は、地球サミットの宣言というのは「科学者に期待する」と

いうことが大きかったのですが、1999年にブダペストで、科学者が世界科学会議というのを開催いたします。これはちょうど92年のリオ会議における、国連からの問いかけに対し、科学者が集まって、それに対する答えを出しています。その答えというのは「これからの科学者は、科学を発展させるだけではない。人類の進歩のための科学をつくりだす。あるいは平和のための科学をつくりだす。更には、開発のための科学をつくりだす。そして社会の中にある科学をつくりだす」このような宣言をしているわけです。これはいわば、社会と科学コミュニティがそのような形で契約を交わしたにほかならないのではないかと思います。その契約というのは、もし公的な資金で研究するという職業に就いたのであれば、その公的な資金の中には社会の期待感が乗っているということです。期待感にうち満ちたお金です。研究するということは、この契約を履行するということにつながっているのではないかと考えているわけです。

ということは結局、『現代の邪悪なるもの』を解決するためには、社会の中に入っていかねばならない、ということをお願いしたんですけれども、これはいわばブダペストにおける科学者の集まり、ICSUの宣言にこれが述べられていて、「科学は社会の中に入っていかねばならない」という宣言をしています。従って、私たちは科学者の総意として、科学者が社会の中に入っていくことを認め、そしてそれが『現代の邪悪なるもの』を解決することに有効なのではないかと思うのです。

非常に具体的に言うと、社会の中の科学者というのは何なのかというと、社会に起こっている現象を見ているということです。実験室の中にいるだけではなくて、社会に何が起こっているのか、そして自分の研究結果を論文として壁の外にポイと放り出すのではなく、実際に、誰かに向かって自分の論文を提供するということです。この行為によって科学者は、自分の研究が社会にどのような影響を与えたか、あるいは自然環境にどのような影響を与えたかということを知ることになります。その認識を通じて、改めてどのような研究をするのか、ということを見直し、どのような情報を社会に提供すればよいのかを考えていく、ということをしていかなければなりません。ここには情報の循環があるのです。

すなわち、科学者を通して社会に情報が出て行き、たくさんの人々に受け止められます。お互いのアクターたち＝行動者たちと呼ぶのですが、それは実業家であったり、政治家であったり、行政者であったり、芸術家であったり、医師であったり、教師であったり、みんな科学を使って、自分の仕事をします。社会はどうか、経済はどうか、教育はどうか、その変わった現象を、再び科学者が観察して、それを研究の種にするわけです。いわば科学者というものを媒介にした、情報循環

が起こった時、私はその社会が科学によって適応的に進化する構造を獲得するということだと思います。科学者というのは、決して密室で研究して、論文をポンポン窓の外へ放り出す人種でなく、社会の中へ入っていかなければならないのだと思います。

大変、堅いことを言ったような気がするのですが。これからは皆さんは密室の中に入っていくのだと思います。それに反対するつもりはありません。そうではなくて、今お話ししたことは、いつか皆さんもそうなるといように、頭の隅に置いていただければよいことです。十分に学習し、専門家になるためには、他のことを忘れて勉強しなければならないこともあります。

最後にひとつ、私の知人の話を申し上げますが、シャーウッド・ローランドというオゾン層破壊、フロンがオゾン層を破壊するというを発見してノーベル賞をもらった人ですが、語ってくれたことがあります。私が、「環境問題で大きな発見をしてノーベル賞をもらった。いつ、環境問題に興味を持ったんだ？」と言いますと、「私は、大気の科学的な組成の科学者であって、環境などという言葉を使ったことがなかった」と。そして彼は、自分の実験室の中のプリキ細工のタンクの中で、様々な組成を混ぜながら実験をしていた。ある時、ある化学式を計算していくと、フロンとオゾンの関係というのがわかるんですね。その時に、あるフロン系の物質がオゾンに当たると、そのオゾンは破壊されてしまう。しかし、その新しいフロン系の物質は消えないということに気がきます。触媒として永久に作用する。そのことである仮定に基づいてつくった方程式を見た時に、オゾン層の破壊ということに、彼は気が付きました。彼は、密室であった研究室を飛び出して、議会にそのことを話しに行きます。「これは危険だぞ」と。当時、若い科学者だったローランドですから、「こんな若い科学者がやっているのではだめだ」と。

しかし、アメリカ議会はなかなか賢いところで、全米科学アカデミーというところに、そのことを尋ねるので。「若い人がこういうことを言っている」と。全米科学アカデミーはそれを受けて、4回、シャーウッド・ローランドを招いてシンポジウムを行う。その結果、これは本当に危険なんだということがわかる。そしてアメリカ議会はいち早く、世界に先駆けて、フロン系のスプレイン缶を禁止しました。

これには、モンリオール議定書というものができて、禁止する10年以上も前に、そうしたことを実行してしまいます。1人の科学者が、自分の研究が社会にどれだけの影響を及ぼすかに気が付いた時、密室から社会に出ること。これは非常に大切だと思います。

これから研究者になる人も、またそうでない人もいることと思いますが、そういった時に、もちろん日々の研

究、自分の研究分野というのは、集中して研究していても、それが社会にどんな影響を与えているのかということ念頭に置きながら。良いことも悪いことも両方あると思いますが、その時は社会に出て、別の働きをするという可能性も常に持っていただきたいということ、私の挨拶とさせていただきますと思います。

ご静聴、ありがとうございました。



吉川弘之元東京大学総長による来賓挨拶

平成16年度入学式行われる 3,128人の新入生が誕生

平成16年度入学式が4月12日（月）に、日本武道館において挙行された。式には約3,110人の新入生と、その父母など約4,900人、合わせて約8,010人が出席した。

午前9時30分、運動会応援部による演舞及び応援歌「ただ一つ」の練習があり、10時18分、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、佐々木総長はじめ理事、副学長、各学部長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の方々アカデミックガウンを着用のうえ登壇し、10時40分開式となった。

式はまず、音楽部管弦楽団、音楽部コーラアカデミーによる学生歌「足音を高めよ」の奏楽、合唱があったのち、佐々木総長が15分にわたって式辞を述べた。続いて、浅島教養学部長の式辞があり、また、海外（ハーバード大学総長、ソウル大学総長）から新入生に向けて届けられた祝辞（ビデオレター）が放映され、最後に応援歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時33分に式を終えた。



平成16年度入学式の様子

入学式総長式辞

新入生の皆さん、入学おめでとう。東京大学は希望とエネルギーとに満ち溢れた若い皆さんの入学を心から歓迎いたします。正確な言い方をすれば、皆さんは国立大学法人東京大学の第一期入学生であり、われわれとしては新たな喜びをもって皆さんを歓迎する次第です。



皆さんは長い間にわたって東京大学への入学を夢に見、営々と努力を続けてきたことと思います。今日の入学式は、東京大学においてさまざまな高い希望を叶えるべく意欲を燃やしている皆さんが一同に集い、これからの東京大学での勉学と生活について改めて決意を固め、勇躍前進を開始する記念すべき機会であります。

東京大学はこうした皆さんの大きな期待に応えられるだけの条件を相当程度備えているものとわれわれは自負しています。東京大学は10の学部と14の大学院研究科をこれまで備えていましたが、この四月からは新たに公共政策大学院が設けられ、法学政治学研究科はいわゆる法科大学院の発足により、大きく拡張されました。また、大学院での教育に大きな役割を果たしている附置研究所が東京大学には11あり、これらは国内・海外での研究活動の中心的存在となっています。東京大学は博士号の授与者が毎年1千名を越える世界に冠たる研究型大学であり、国際的な専門学術誌への発表論文数においては世界のトップを争う位置にあり、研究成果については手許の資料にありますように、過去十年の論文の被引用回数において世界の大学の中で昨年の16位から大きく13位に躍進しました。大学の評価についてはさまざまな俗論がありますが、皆さんには是非とも自ら学ぶ大学についてのこうした客観的データを頭に刻んでもらいたいと思います。

ところで俗に「初心忘るべからず」ということがよく言われます。こういうことが言われるのは現実には容易に人間はその初心を忘れ、その時々の流れに身を任せ、容易に墮落し易い存在であるからです。実際、大きな希望と期待に胸を膨らませて東京大学に入学した若人の中にもその卒業時には四年前の初心をすっかり忘れ、残念ながら変わり果てた存在になっている者がいることは認めざるを得ません。

大学生活は人生の中で最も自由な生活を享受できる時期であり、他人の掣肘を受けることなく、伸び伸びと自らの可能性を験すことができる稀有の時期です。しかしそれだけに、自らをどのような存在にしていかにして各人が全面的な責任を負わなければならないことを当

然含んでいます。他人のせいや運不運のせいにして弁解できる余地が少ない人生の時期なのです。極論すれば、四年後皆さんがどうなっているかは、皆さんの初心の内容と皆さんの意志にほとんど全てかかっています。こうした時期を送ることができるということは実に素晴らしいことではありますが、同時にそれが自らの志と人間としてのあり方に深く関わることを肝に銘じ、人生一度のこのチャンスを大事に、そして思い切って活用していただきたい。

私は今日ここで皆さんには是非とも卓越性の追求を課題にさせていただきたいということを述べたいと思います。卓越性の追求と言うとエリート主義や傲慢さを推奨することのように思う人もいるかも知れません。しかし、大した能力も力量もないのに他人を踏み台にして傲慢な態度をとったり、ふんぞり返ったりして生活する態度は卓越性への感覚とは全く関係ありません。あるいはそういう意味でしか卓越性を理解できないところにどうにもならない精神的貧しさがあるといって過言ではありません。卓越性の追求はそれが一人の人間の真摯な取り組みである以上、誰の迷惑にもならないし、やがてはさまざまな形で社会を裨益することにつながるものです。

卓越性の追求とは知的活動においてであれ、実践的活動においてであれ、一流の存在になろうとする試みであります。それは自らをあらゆる面で不断に鍛え、自らの可能性を大きくする努力と深く結びついています。あるいは、自らを「耕す」ことに人一倍真剣に取り組むことであるといつてよいでしょう。つまりは自らを大切にすることに精神的につながります。逆に、自らを「耕す」のを怠った人間は精神に野草が生え、荒廃し、自分が何者であるかが分からなくなるのは早晚明らかです。自らが何者であるかが分からない人間に出来ることは付和雷同と右顧左眄でしかありません。

これから学生生活を送る皆さんの特権は、この卓越性の追求を何の遠慮もなしに、思い切り試みることが出来る点にあります。私の考えでは、東京大学とは日本全国から更には海外から卓越性の追求にこだわる若者たちが殺到する空間であります。私自身の経験によれば、東京大学には必ずや皆さんそれぞれにとって本当に「すごい」人間や自分が到底「かなわない」人間がいるはずであります。それは教授であることもあれば、先輩友人であることもありましょう。こういう人間に出会うということ、それによって刺激され、卓越性の追求の厳しさを肌で感ずること、これが皆さんのこれからの東京大学での生活の醍醐味でなければならないのです。従って、東京大学は怖いところであり、同時に、他では味わえない貴重な体験をすることができる空間なのです。

若し、皆さんが「すごい」人間や「かなわない」人間に出会うという体験をしなかったとすれば、それはこの

卓越性の追求という感覚が初めから皆さんにおいて摩滅していたに違いないのであって、私としてはその人の不幸に同情を禁じ得ません。人間には所詮「見えるものしか見えない」のであり、十代にしてこうした感覚が麻痺していたとすれば、その後の人生はさぞかし寂寥たるものであらうと思います。

誤解のないように言えば、こうした卓越性の追求は社会的な意味での出世や成功を些かも保証するものではありません。社会における出世や成功はさまざまな偶然の産物であり、個人の力で左右できる範囲は限られています。そもそも社会的成功は希少性を特徴としており、全ての人間がそれに与えることは出来ないということを前提にしています。その上、卓越性という積極的な特徴が乏しいにもかかわらず、「他に人がいない」ということで出世する人の例が珍しくないのがこの世の中です。しかしながら、卓越性の追求に興味もなければ関心もない人間が指導的地位に立つ組織や社会が素晴らしいとは誰も考えないことでしょう。更にそうした人間がふんぞり返り、傲慢さを撒き散らす社会が不愉快なことは言うまでもありません。

こうした事態が起こらないようにする唯一の方策は、卓越性の追求にこだわる人間たちが数多く存在するような社会を作ることです。それは卓越性に対して正常な関心と感覚を持つ社会になることに他なりません。そういう社会であれば、「他に人がいない」といった不毛な選択に曖昧に身を委ね続ける必要はなくなります。卓越性を追求する人間が社会的成功をおさめることができるわけではありませんが、社会的成功をおさめる人間には少なくとも卓越性の追求とその意味について正当な感覚を持ってもらわなければなりません。民主的な社会は卓越性の追求可能性を万人に開いたと考えられますが、同時に、それは卓越性に対する感覚を慢性的に摩滅させる可能性を含んだ社会であることも直視しなければなりません。

何はともあれ、皆さんが一刻も早く「すごい」人間や「かなわない」人間に出会うことを私は切望しています。この衝撃的な体験から卓越性の追求は自覚され、開始されることとなります。東京大学に入学しながらこうした体験をしないというのは最大の不幸であります。必死に目を凝らし、周囲を窺い、素晴らしい人間を発見していただきたい。一人で机に向かっているだけでは、コンピュータをいじっているだけではそれは実現できません。こうした卓越性への感覚とそれへの真摯な取り組みは日本と世界をよりよいものにするための出発点ではありますが、同時に東京大学をより素晴らしいものにしていく重要な拠点でもあります。大学の理想である素晴らしい学生と素晴らしい教授団とは相互の切磋琢磨によって初めて可能になります。東京大学はそれを現実に真に国際的

水準で実現できる可能性を持った日本で数少ない大学であると私は信じています。皆さんは卓越性への情熱を武器に教授団に容赦なく挑戦していただきたい。そして問題を感じたり不満があれば私や副学長に遠慮なく物申していただき、東京大学という学問共同体の前進のために積極的に参加していただきたい。そうした皆さんの活動を私は総長賞や学生ジュニア・ティーチング・アシスタントといった制度で応援します。

最後に、四年後に皆さんが今よりも大きな器量と優れた能力の持ち主になることを心から祈念し、皆さんそれぞれの初心が叶うよう、その善戦奮闘を切望して私の式辞と致します。

平成十六年（2004年）四月十二日

東京大学総長
佐々木 毅



入学式会場（日本武道館）



音楽部管弦楽団によるニュールンベルグの
マイスタージンガー前奏曲の演奏

入学式教養学部長式辞

東京大学に新しく入学された一人ひとりの学生の皆さんに心からお祝いを申し上げます。また、新入生の御家族の方々や関係者の皆さま方にもお慶びを申し上げます。難しい入学試験に合格され、晴れて東京大学に入学されましたこと、私達教職員及び在学生一同、心から歓迎いたします。若く、そして力強いエネルギーと柔軟な思考力をもった新入生を迎え入れることができたことは、私達にとりまして大きな喜びであり、誇りでもあります。

皆さんが入学された東京大学は日本で最も長い伝統と歴史を持つ大学であります。多様な分野において、日本を代表する国立大学として、日本のみならず世界をリードする人材を輩出してきたのは、ご存知の通りです。しかしながら、新入生の皆さんには、今、この大学が大きな変革期にあることを理解していただきたいと思います。

東京大学は、この四月一日から「国立大学法人東京大学」となりました。これまで全国にあった八十九の国立大学は制度的には平等に扱われ、すべて一律に国又は文部科学省によって学生定員や運営費などの制約や保護の中にありました。しかしながら、これからは法人化されたことによって、各大学にかなりの部分、運営や教育システムが任せられ自由裁量ができるようになり、各大学が学内外に“個性”と“人格”を示すこととなります。従ってこれまでの東京大学が育んできた良き伝統と歴史を受け継ぎながらも、知的、人的、組織的財産に加えて、新しい文化を吹き込み更に大きく発展させることが求められています。東京大学ならそれが可能であると私は思っています。

皆さん方は入学してからの二年間を、都心であって、しかも緑豊かで学際的な雰囲気をもつ駒場キャンパスで過ごすこととなります。この二年間は、前期課程と呼ばれ、主としてリベラル・アーツの理念に基づいた教養教育を受けます。しかし、それは単なる古い教養主義ではありません。駒場の教養学部では全学の支援のもとに、教養教育を常に再定義しつつ、基礎知識や鋭い感性の上に新しい教養教育を行っているのです。駒場キャンパスの教養学部はそのような意味で、昨年は「特色ある大学教育支援プログラム」の中で「教養教育と大学院先端研究との創造的連携の推進」で二十一世紀COL（Center of Learning）に採択を受けています。また、教養学部の延長にある大学院組織では世界の研究拠点として、三つのプログラムが二十一世紀COE（Center of

Excellence)として実行されています。東京大学全体では、二十六の二十一世紀COEプログラムが採択され、日本はもちろん世界へ向けて今、多くの研究や教育を発信しているのです。さらに、皆さんは駒場での二年間に、全国から集まった多くの友人の他に、外国人留学生やAIKOM (Abroad in Komaba) という制度によって国外から来た多くの学生と出会うことになると思います。その意味でもまた、駒場は国際的な総合文化の拠点になっているのです。これからはこれらを更に発展させると同時に、皆さんの一人一人が東大で学んだことに誇りを持ち、個性に輝く人格の礎をこの駒場の地でしっかりと築いてほしいと思います。

例えば、私は生命科学、とりわけ生物科学を専門としていますが、この生命科学は今や単に自然科学の一分野ではなく、まさに総合科学の領域なのです。二十一世紀の始まりと共に、ヒトの全ゲノムが解読されたのをはじめ、クローン羊ドリーの誕生やヒト胚性幹細胞の樹立など、これらの内容は私達ヒトそのものの存在や考え方に大きな影響を与えてきています。言い方を変えれば、生命科学は従来の医学、農学、薬学、理学の枠を完全に越えて、今や工学、数学、社会科学、人文科学の領域へと大きく踏み込んでいます。このことは、まさに私達ヒトという存在を理解し、語る場合、これまで以上に複雑な問題がはらまれることを意味します。そこには生命倫理の問題も欠かせないし、ヒトを含めた生物が生存するための環境学、社会学、経済学、そして私達の心や精神の問題まで対象になるからです。そのような学問がどのように進んでいくのか、また、このような学問の進歩が人間にとって長い目でみてどのような意味を持つのか、そうしたことを考えていくのは、まさに皆さんの役割なのです。

今や、学問の進歩と変革とともに、学ぶ者自身の自己の中にしっかりと哲学を作ることが求められているのです。今までの受験勉強の殻をふるい落とし、是非とも自分を自由にし、リフレッシュして下さい。そのためには優れた古典をじっくりと静かに読み、異なる文化を、語学や例えば文学を通して学び、さらに実体験を重ね、基礎学問を学び、己を鍛えてゆくことが必要となってきたのです。今までのように、すでに敷かれたレールの上をただ走るのではなく、自分で荒野の中にレールを敷いていく勇気と努力と忍耐とが必要です。レールを敷くということへの判断とそれを成し遂げる能力、努力、そして物事の善し悪しを見極める能力と英智が今、皆さん方に最も求められているのです。単に与えられたものをこなすのではなく、そのもっている意味を問い、自ら広く深く掘り下げていくことが必要なのです。

最近、アメリカに行く機会があった時、アメリカにいる日本の留学生に会いました。彼は、留学する前には、

単に英語で話さえできればアメリカで通用すると思っていたらしいのですが、実際にはアメリカの人に日本の文化や芸術、歴史や経済について問われても何一つともに答えられない。今、つくづくと大学時代にしっかりと学び、教養を身につけておけば、こんなみじめな思いをしないで済んだのに、と言っていました。日本の文化には、わび、さびの心という固有のものがあり、また花鳥風月に代表される四季折々の自然の美しさを心と肌で感じ取り、和歌や短歌、俳句、絵画に取り入れる風雅の心があります。これは直ちに実利に結びつくようなものではありませんが、これなくしては、日本の文化を語ることはできません。同様に、自然科学においても、すぐには役に立たないように思われる基礎的な分野の学問があつてこそ、応用への発展が可能になるのです。とかく、最近是人に役立つことや利益追求のみが優先されて評価されていますが、学問の発展や知的財産の構築などを長い目でみると、やはりそうではなく、しっかりと各自の中に基礎学問が根付いていることが必要なのです。科学 (Science) と技術 (Technology) は本来は別々なものであるのですが、日本では一緒に使われ、科学技術という呼び方で一体化されています。自然科学の発達に科学と技術は両輪なのですが、ともすれば最近は本来の科学が軽視され、技術をもって科学だと思っている人が増えているのも事実です。しかし実際には、この両輪をうまく動かし、発展させていくことが望まれているのです。

自己のアイデンティティーの確立もまた、重要なことです。問題は、単に自己主張をすることではなく、伝統と変革との間 (はざま) で自己の特性を見つけ、伸ばしていくことなのです。東京大学の前期課程はまさにそのようなリベラル・アーツ教育と各々の分野の先端研究の橋渡しの場所であり、期間であるのです。私は東京大学に入学してこられた人達が、人生のいろいろなことに悩みながらも一つ一つ、自らの力で、あるいは友人や教師と一緒に解決していく中で強い精神力を育み、真のエリートとしての知識と哲学・思想を身につけていくと欲していると思っています。

目を国外に向けてみれば、EU統合後の新しい世界の枠組み、グローバル化、情報とメディアの氾濫、宗教的対立、環境汚染、温暖化、新しいウイルスと生物間感染の発生、ロボット工学や生命科学の進歩など様々な大きな変化が生じています。一つの国が一つの国だけで閉じるというようなことは、もはやできないのです。そのような中であつてこそ、次の世代を担う皆さん方に大きな期待がかかっており、それらの責任を感じてもらいたいです。失敗を恐れずにチャレンジして下さい。現状だけを見て分析するのではなく、大変難しい課題ではありますが、五年先、十年先を読み通す能力もこれから必要となってくるでしょう。そのような中で、まず一番大切

なことは各人の心身の健康を保つことです。そして、何事にも意欲をもって取り組むこと、そしてあきらめずに成し遂げる強い精神力を養うことです。東京大学には総長賞というものがあり、学業のみならず、スポーツ、文化活動、クラブ活動、ボランティア、その他いろいろな分野で学生の模範となる行為に対して、総長が学生を表彰されます。私は年二回あるこの総長賞の表彰式を見る時、いつも東京大学の学生の持っている素晴らしい能力を感じ、誇りに思っています。

東京大学の前期課程の教育では、夏学期、冬学期を合わせて約二千五百コマの授業を開講しています。これだけの授業の多様さと質の高さが東大教養学部の魅力であります。学問においても自然の摂理においても多様性と柔軟性こそが真の大きな発展をもたらすと思います。教養教育では基礎知識の習得に加え、人格の形成にも重点を置いています。この得がたい機会に、自分から求めて学習することを奨めたいと思います。

最後になりますが、東京大学教養学部では新しく教養教育開発室を昨年開設し、教養教育の尚一層の充実をはかり、学生の方々の期待に添えるよう努力しています。皆さんは今、新しい人生の門出を迎えています。そして、四年後あるいは六年後に大学を卒業する時に、有意義な大学生活であったと心から思えるように日々努力し、人生と人格のポテンシャルを高めて下さい。

皆さんが教養学部の二年間、実り多い時を過ごされることを切に願って私の祝辞としたいと思います。



平成十六年（2004年）四月十二日

東京大学教養学部長
浅島 誠

学生部

平成16年度進学指導担当教員決まる

教養学部（前期課程）から専門分野へ進学しようとする学生に対し、進学に関する諸問題について個人的な指導

や相談にあたる今年度の進学指導担当教員は、次のとおりである。

平成16年度進学指導担当教員名簿

平成16年4月現在

学部	進学指導担当学科	職名	氏名	連絡先（内線）	
法	全 類	教授	馬場 康雄	23219	
医	医 学 科	教授	栗原 裕基	23495	
	健康科学・看護学科	教授	菅田 勝也	23523	
工	社会基盤学科	講師	中井 祐	26134	
	建築学 科	助教授	西出 和彦	26168	
	都市工学 科	教授	花木 啓祐	26236	
	機械工学 科	教授	中尾 政之	26360	
	産業機械工学 科	教授	中村 仁彦	26379	
	機械情報工学 科	教授	中村 仁彦	26379	
	航空宇宙工学 科	助教授	李家 賢一	26595	
	電気工学 科	助教授	古関 隆章	26676	
	電子情報工学 科	助教授	苗村 健	26668	
	電子工学 科	助教授	池田 誠	26661	
	物理工学 科	教授	藤原 毅夫	26810	
	計数工学 科	教授	岡部 靖憲	26895	
			教授	原 辰次	26892
		マテリアル工学 科	教授	山口 周	27078
		応用化学 科	講師	河野 正規	27258
		化学システム工学 科	助教授	大久保 達也	27348
	化学生命工学 科	助教授	橋本 幸彦	27269	
	システム創成学 科	助教授	登坂 博行	27082	
文	全 学 科	助教授	下田 正弘	23757	
理	数 学 科	助教授	吉川 謙一	(駒場・数理) 47047	
	情報科学 科	教授	辻井 潤一	24098	
	物理学 科	助教授	櫻井 博儀	24233	
	天文学 科	教授	柴橋 博資	24256	
	地球惑星物理学 科	教授	濱野 洋三	24293	
	化学 科	教授	濱口 宏夫	24327	
	生物化学 科	教授	横山 茂之	24392	
	生物学 科 (動物学)	教授	岡 良隆彦	24438	
	生物学 科 (植物学)	教授	中野 明彦	24469	
	生物学 科 (人類学)	教授	青木 健一	24485	
	地学科 (地質学・鉱物学)	教授	浦辺 徹郎	24542	
地学科 (地理学)	助教授	池田 安隆	24574		
農	一類				
	応用生物学専修	助教授	山下 修一	25092	
	環境生物学専修	助教授	中園 幹生	25074	
	緑地環境学専修	助教授	吉田 薫	28086	

学部	進学指導担当学科	職名	氏名	連絡先(内線)
農	生産生物学専修	助教授	中園 幹生	25074
	二類			
	生命工学専修	助教授	大西 康夫	25126
	生命化学専修	助教授	渡邊 秀典	25120
	三類			
	森林生物学専修	助教授	小野 良平	25208
	森林環境科学専修			
	森林資源科学専修			
	四類			
	水圏生命科学専修	教授	青木 一郎	25307
	水圏環境科学専修			
	水圏生産科学専修			
	五類			
比較農業・経済学専修	助教授	小田切 徳美	25322	
開発政策・経済学専修	教授	泉田 洋一	25463	
六類				
地域環境工学専修	教授	大政 謙次	25340	
生物システム工学専修	助教授	芋生 憲司	25359	
七類				
環境共生システム学専修	教授	磯貝 明	25269	
植物資源プロセス学専修	助教授	竹村 彰夫	25268	
八類				
獣医学専修	助教授	松木 直章	23096・25419	
九類				
国際開発農学専修	教授	相良 泰行	27536	
フィールド科学専修	助教授	岡本 研	28921	
十類				
動物生命システム科学専修	助教授	高橋 伸一郎	25184	
経済	経済学 科	助教授	柳川 範之	25606
	経営学 科			
教養	超域文化科学 科	教授	大澤 吉博	(駒場) 46311
	地域文化研究学 科	教授	増田 一夫	(駒場) 46392
	総合社会科学 科	教授	大越 義久	(駒場) 46452
	基礎科学 科	助教授	前田 京剛	(駒場) 46747
	広域科学 科	助教授	伊藤 元己	(駒場) 46305
		助教授	松原 宏	(駒場) 46254
	生命・認知科学 科	助教授	丹野 義彦	(駒場) 46265
教育	総合教育科学 科	教授	川本 隆史	23943
薬	薬学 科	教授	松木 則夫	24780

備考：連絡先電話番号

本郷(ダイヤルイン) 5841- (内線番号の下4ケタ)
駒場(ダイヤルイン) 5454- (内線番号の下4ケタ)
駒場・数理(ダイヤルイン) 5465- (内線番号の下4ケタ)
例) 内線20000の場合 → 5841-0000

**海洋研究所
先端海洋システム研究センターの看板が上
掲される**

海洋研究所では、4月1日(木)に小池海洋研究所長、佐野先端海洋システム研究センター長、巻渕海洋研究所事務部長をはじめ関係者が参加して「附属先端海洋システム研究センター」の看板の上掲式を行いました。

先端海洋システム研究センターは、これまで海洋循環過程、海洋物質循環過程の基礎研究に立脚しつつ、新しい観測・分析・解析手法を取り入れた総合技術の確立により海洋環境問題に取り組む「海洋環境研究センター」を改組し、新設されました。同センターは海洋環境研究センターでの観測・研究体制を踏襲しつつ、衛星などの新たなプラットフォームを導入し、高密度観測・最新の技術による高感度分析、数値シミュレーションによる先端的データ解析手法を開発し、近未来における地球環境問題に取り組む「海洋システム計測分野」と生物多様性と遺伝子資源の実態を、最新の分子系統解析手法によって明らかにし、化石を用いた年代測定や長期環境変動の復元データと合わせ、海洋という環境における生命の進化、生物多様性の形成過程・維持機構の解明を目指す「海洋システム解析分野」の二つの分野から構成されます。今後は全海洋を時空間的に連続した一つのシステムとして捉え、先端的な視点と技術を基礎におき学際的、統合的な海洋科学研究の中核として、海洋における大きな課題に取り組むこととなります。



先端海洋システム研究センターの上板
左から小池所長、佐野センター長

**生産技術研究所
第29回生研公開講座 イブニングセミナー
「最先端エレクトロニクス—研究動向と将来
への展望」**

お知らせ

我々の生活はエレクトロニクスの発展とともに大きく変化してきました。今後もエレクトロニクスの担う役割はますます広がっていくことでしょう。生産技術研究所では、将来の豊かな高度情報社会の実現を目指し、基礎技術・応用そして社会利用へとつながる幅広い視点から最先端情報エレクトロニクスの研究を行っています。本イブニングセミナーでは、全8回にわたり材料・デバイスから情報や制御など各分野の最前線で活躍する講師陣により、最新の研究動向を紹介します。(情報・エレクトロニクス系部門 岩本敏)

日 時：5月7日(金)～7月2日(金)
(各金曜日 18時から19時30分まで)
ただし、6月4日(金)は休講

場 所：生産技術研究所
駒場リサーチキャンパスD棟6階第1会議室
受講資格：学歴・所属など受講資格の制限は一切ありません。学生、大学院生から一般の方まで、ご興味のある方はどなたでも参加できます。

定 員：90人(先着順)

受 講 料：無料

参加方法：事前の申込みは必要ありません。

なお、定員オーバーでも受け付けますが、席のない場合もあります。

※講義内容は都合により変更になることがありますので
ご了承下さい。

- 5/7 ユビキタス情報社会に向けたナノテクノロジーの展開 教授 荒川泰彦
- 5/14 空間知能化—ロボティクスと空間の融合— 助教授 橋本秀紀
- 5/21 ウェブ・マイニング(巨大ウェブ情報からの知識獲得) 教授 喜連川優
- 5/28 雷放電のEMP 教授 石井 勝
- 6/11 急速に微細化するシリコントランジスタの将来展望 教授 平本俊郎
- 6/18 カオス脳を創る 教授 合原一幸
- 6/25 情報セキュリティが築くIT社会 教授 今井秀樹
- 7/2 半導体ナノ構造による電子の量子的制御と先端エレクトロニクス応用 教授 榊 裕之

学生部

第77回五月祭の期日決まる

お知らせ

本年度の五月祭の開催期日は、4月16日（金）の学生生活委員会で下記のとおり決定されました。

なお、5月28日（金）午後の学部の授業は、4月2日（火）の研究科長・学部長・研究所長合同会議で了承を得ましたので、休止となる旨お知らせします。

5月28日（金）午後 学内公開

5月29日（土）全日 一般公開

5月30日（日）全日 一般公開

原稿募集

「学内広報」に学内の情報をお寄せください。

- ・文字数800字以内（写真がある場合は文字数を控えめにしてください。）
- ・写真には、キャプション（説明文）を添えてくださるようお願いします。

送付先 東京大学総務部広報課

TEL：03-3811-3393 内線：82032、22031

FAX：3816-3913

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

原稿の締切は各月第1・3水曜日、配付は翌々週の火曜日です。ただし、該当日が祝日の場合や8月を除きます。

平成16年度学内広報の発行スケジュール

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

医学部附属病院

ボランティアを募集しています！！

お知らせ

東大病院には、「東大病院にこここボランティア」というボランティア組織があり、今年7月に10周年を迎えます。

ボランティアさんは、職業をお持ちの方、主婦の方、学生さんなどボランティア活動に興味のある方が、スカイブルーのエプロンをつけてご自分の都合に合わせてながら活動を続けています。

患者さんにとって心休まる暖かい環境作りに、あなたのやさしさを生かしてみませんか？

スタッフ一同、『あなた』のご参加をお待ちしています。

活動場所

〔医学部附属病院
本郷キャンパス内
文京区本郷7-3-1〕

活動内容

院内ガイド（患者さんのご案内、受付のお手伝い）、車椅子の介助、院内学級の送迎、図書の貸出、子供の遊び相手、病院の催し物（ミニコンサート、七夕・クリスマスコンサート等）のお手伝いなど

活動時間

月～金 ① 8：30～11：30

② 9：30～12：30

③ 12：00～15：00

これらの時間帯の中で、あなたのご都合に合わせてお選びいただけます。

（1日3時間・月に2回以上）

応募書類締切日 6月11日（金）

* ボランティア活動は無報酬でお願いしています。

* 条件 健康な方

問い合わせ先

医学部附属病院医療支援課 03-3815-5411（代表）

担当者 水谷・中井

内線32606 FAX 03-5800-9765

橋本コーディネータ

内線32465 FAX 03-5800-8770

名前が変わった

史料編纂所をご存知だろうか。学内でも、余りご存知でない向きがあるかも知れない。日本の歴史を解明するうえで基本となる史料を、国内外から収集して研究し、それを編纂し、出版するのを仕事としている附置研究所である。昨今では、収集・所蔵史料および史料情報のデータベースの構築・公開にも積極的に取り組んでいる。

では、史料編纂所の名前が変わったのをご存知だろうか。そう、「編さん所」から「編纂所」へと表記が変更になったのである。1950年に東京大学の附置研究所として改組された際に、「纂」が当時の当用漢字になかったために、これまでひらがなで表記してきたのである。実際には、「纂」と漢字で書いている場合が多いので、筆者など公的な文書に「纂」と書き、ひらがなで書くよう指導(?)を受けたこともしばしばであった。それが、今回の法人化準備作業の過程で変更が認められ、晴れて公式に「編纂所」と称することができる



ようになった、という次第である。

さて、表記が変わればいいというものではない。東京大学の附置研究所としての中身が肝心である。史料編纂所には、明治以来収集してきた膨大な写本史料がある。また、国宝「島津家文書」をはじめとする原史料も多く所蔵しており、これが史料編纂所の大きな特徴である。しかし、学内には他にも歴史的な史料を保存している機関が存在している。そうした機関との協力関係が、今後さらに模索されなければならないだろう。これまでもそうした試みはなされてきたが、まだまだ十分とはいえないように見受けられる。歴史研究はもちろん史料管理や史料情報などの分野での史料編纂所の蓄積を生かした、学内諸機関との連携・共同研究を一層推進することが、史料編纂所にとって附置研究所としての認知度を高めるとともに、東京大学そのものの発展にも寄与することになるのではないか。

「編さん所」から「編纂所」へ、単なる字句変更に止まらない意義を考える機会にしたい。

(史料編纂所 佐藤孝之)

(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1289 2004年4月28日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393
e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index-j.html>



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO